

氏 名	佐 藤 啓 介
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学位記番号	文 博 第 408 号
学位授与の日付	平 成 19 年 5 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 思 想 文 化 学 専 攻
学位論文題目	リクール哲学におけるキリスト教思想研究

論文調査委員 (主査) 准教授 芦名定道 教授 片柳榮一 准教授 杉村靖彦

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、哲学者ポール・リクールが本格的に解釈学的哲学を導入した1960年代以降における、彼のキリスト教思想の全体像を解明することを目標としたものである。本論文の研究方法・特色は以下にまとめられる。

(1) 解釈学導入以降の彼のキリスト教思想の展開を辿る通史的研究。(2) そうした展開に一貫し、彼のキリスト教思想全体を牽引する目的と根本概念があるかどうかを検討する本質的構成研究。リクールが積極的に語るのを控える三つの領域について、創造論、終末論、神論においてそれぞれ主題化する。(3) リクルールの思想の解明と同時に、その現代的意義を採るため、リクール以外の現代フランス宗教哲学の知見と比較し、リクルールの思想の問題点を明らかにする。

こうした視点に立ち、第Ⅰ部では、中期リクルールのキリスト教思想の成立と展開が論じられる。リクールは自己意識が直接自己自身について反省する驕りを批判し、「自己意識に対する禁欲」を要求した。また、解釈学的思惟が完遂することも批判し、「絶対知に対する禁欲」を要求した。このように、二つの自己の驕りに対し謙虚さを要求する二極構造が、中期リクルールの宗教言語論全体を根底から支えている。そうした構造に支えられ、聖書の解釈によって得られるのが「多中心的自己」と呼ばれる自己理解であり、その自己像がイデオロギーとユートピアという社会思想と内的連関性を持つことが判明する。

第Ⅱ部では、後期リクルールの「贈与」論を中心として、彼のキリスト教思想と社会・倫理思想の関係を考える。リクールは、「愛と正義の弁証法」という視座のもと、キリスト教思想と社会・倫理思想を関係づけている。人間関係に関わる水平的贈与は、確かに正義の功利主義的側面を批判する愛の命令を提示している。しかし、その極端さゆえ、そのままでは正義を矯正する現実性を持ちえない。そのため、「何のためでもなく与える」愛を可能にさせる寛大さを養うために、垂直的贈与、つまり、私たち自身に対する神の愛の贈与を自覚する必要がある。神の贈与に気がつくことで、それまで知られていなかった神への依存が明らかにされ、相互無関心な関係とは異なるかたちの関係があるということに目を開かされる。その瞬間「(神によって垂直的に)与えられたから、(水平的に隣人に)与える」という、垂直軸から水平軸への「座標転換」が生じる。この贈与の経綸の座標転換こそが、愛と正義の弁証法全体を支える結び目であることが解明される。

第Ⅲ部では、リクールキリスト教思想の本質問題を論じる。その際、(a) 哲学者であると断りながら何故彼は聖書にかくも言及するのか、(b) 半世紀に及ぶ彼の宗教思想には、通底する思想が存在するのか、という二つの問いを立て、彼の聖書観の根底にある「満ちあふれの論理」概念を用いて答える。その結果、満ちあふれの論理という概念が、(1) 彼の聖書観を支え、(2) 聖書解釈の必要性の源泉となり、(3) 聖書解釈学の方法を規定していることが明らかになる。そして、同等性の論理だけでは解決しえない「悪にもかかわらず」の希望が求められているが故、彼は聖書に言及するということが明らかになる。その意味で、リクール哲学は最終的には、哲学と非哲学の境に立つ必要があるのである。

さて、贈与の経綸が、世界における自己のあり方、ならびにその自己から生まれる社会に関わる聖書思想の核であったとするならば、その核の両端にあるのが、「創造」と「終末論」であり、その両端に現われるのが「神」である。これらは、

リクールキリスト教思想の最核心にある主題であり、第Ⅳ部以降のテーマとなる。

第Ⅳ部はリクールの創世記解釈から窺える創造論の変遷を辿る。悪の神話期には、自己の悪しき性癖を「非内在化させた」経験の言語表現という創世記解釈がなされ、中期には共同体のアイデンティティの基礎づけという解釈が施される。それに対し後期では、分離の概念を強調することで、脆い他者に対する責任を負って行為する自己が現われてくるドラマとして創世記が解釈される。ここから、自らの有限性に行動することで応答し、「世界の受苦を減らす行動」する自己理解の基盤をリクールが創世記解釈から引き出していることが明らかになる。

第Ⅴ部では、リクールの終末論理解の変遷を辿るとともに、それを現代宗教哲学の観点から捉え、その問題点を指摘する。60年代初頭に「理想的と見なされる世界の到来という主題に対する宗教的希望を表現している思惟の総体」として定式化された終末論は、60年代後期の希望の解釈学によって、終末論に希望の次元が導入されることで、(1)「可能なるものの情熱」という想像力の問題圏との近さが発生し、(2)カント的「再生」概念との近さが発生し、(3)満ちあふれの論理からその目的論的性格が消え、逆説性が強調されるようになった。こうした終末論の形成と展開が、80年代以降の贈与の経緯、しかも犠牲の論理を含まない経緯の成立の基盤となることが明らかになる。しかし、後期リクールの終末論である赦し論に関しては、リクールが聖書から描き出すイエスの赦しに「復讐」の深みや「憎悪」が描かれておらず、赦しの範例としては不十分であることを批判する必要がある。そのため本研究は、復讐一般についての宗教哲学的考察をおこない、犠牲者に代わって復讐したことが、犠牲者の記憶を引き継いだことにならず、本質的に犠牲者への忠実さを裏切る行為であると解明した。よって、死者への忠実さを保持せんとするならば、死者の記憶を代理するのではなく、死者自身に復讐の可能性を返し、その暗い記憶をそのままにしておくべきだと提起した。

第Ⅵ部において、現代フランス宗教哲学というコンテクストに位置づけながら、リクールの神論を主題的に扱うことで、以下の結論が得られた。(1)リクールは、神と存在の関係を思惟する際、「ありてある者」が我々の存在論的思惟に対し、思惟すべきものを与える働きをなすと考えている。マリオンの神論においても、「神と存在の関係を思惟する只中で、思惟に起こる出来事」の意義が強調されており、ここに現代フランス宗教哲学全体が指し示す一つの可能性を見て取ることができるとともに、リクールの神論も、そうした文脈の中で重要な位置を占めていることが明らかになる。(2)リクールは中期から後期にかけて、翻訳論を経由して、「『ありてある者』は、存在という多義的な語に、さらに新たな意味を追加する」と主張している。そして、その新しい意味とは「働き」であると主張している。本論文では、その神論に合流したのが、中期以降彼が温めてきた「働きの存在論」であることが明らかにされる。(3)以上から解明される後期リクールの神論とは、生を死に変え死を生へ変える愛の働きを働きながらある神である。つまり、神において、「存在する＝働く＝愛する」という等式が成立する。そして、そうした等式を可能にさせているのが、中期において展開された隠喩的存在論である。本論文は、こうしたリクールの神論の形成過程とその帰結を解明する。この結論は、他のリクール研究者がまだ指摘していない結論であり、先見性を認めることができると思われる。

以上から導かれる結論は、以下の3点にまとめられる。

(1)キリスト教思想が哲学へ働きかけることで促される「理性の慢心への謙虚さ」と、キリスト教思想を前にして哲学が保持する「理性の制約に付き従う誠実さ」という二重性が、リクールのキリスト教思想を特徴づけている。こうした哲学は、昨今急進化しつつある哲学の他者論的転回を、その倫理的射程を損なうことなく矯正できると期待される。

(2)彼の神論に由来する満ちあふれの論理は、哲学が直面せざるをえない様々なアポリアに対し、極めてラディカルな形象を提示することで、「アポリアにもかかわらず哲学し、行為すること」への無条件的な希望を与えるものであること。リクールは、たとえその形象に「宗教の暗部」がまわりついてこようとも、その形象の強さを信じている。

(3)そうした形象に対する「希望」の構造は、リクール自身の思惟をも構成する構造であること。つまり、聖書が語る言葉について思惟することで「思惟させられる」という、使役形かつ受動態によって彩られるような形而上学的経験こそが、「リクール哲学の中にキリスト教思想が入ってくる」根底にあるのである。

## 論文審査の結果の要旨

ポール・リクール (Paul Ricœur, 1913-2005) は現代フランスを代表する哲学者の一人であって、その思索は実存哲学や

現象学から、解釈学、言語哲学（隠喩論）、テキスト理論、自己論、そして倫理思想、社会思想まで広範に及んでいる。本論文の論者は、広範かつ長期にわたって展開されたリクール哲学をキリスト教思想という視点から体系的に解明するという意欲的な研究テーマを設定し、そのために必要となる多くの文献を緻密に分析すると共に、現在のリクール研究の現状を踏まえた考察を行っている。世界的なリクール研究の動向から見ても、本論文は新しい重要な研究成果を付け加えたものと言える。さらに本論文は、リクールと同時代の思想家との比較などを通して、キリスト教思想と哲学との関係理解や新たな宗教哲学の構想までを射程に入れた議論を展開しており、キリスト教思想研究にとっても重要な研究成果であると評価できる。

本論文では、リクールのキリスト教思想を再構成するために、周到な方法論が採用されている。それは、解釈学的哲学の本格的な導入以降の中期リクール（1960年代以降）の哲学思想の発展を後期まで辿ることによって（第Ⅰ部、第Ⅱ部）、リクールのキリスト教思想の根本原理を「満ちあふれの論理」として取り出し（第Ⅲ部）、それをラコックとの共著『聖書を考える』（1998年）における論考と結びつけることによって、そこから、後期リクールの思索におけるキリスト教思想の体系的な議論（創造論、終末論、神論）を再構成する（第Ⅳ部、第Ⅴ部、第Ⅵ部）、という戦略である。このような研究方法は、リクール哲学の過剰解釈という危うさを孕みつつも、魅力的かつ説得的なものと言える。

本論文の主要な成果は以下の点に認められる。

1. まずリクール研究上の研究成果として評価できる点についてであるが、中期以降のリクールのキリスト教思想の根本に「満ちあふれの論理」（「にもかかわらず」「ますます」という逆説的な論理）が位置づけられることを示し、さらに「満ちあふれの論理」と「贈与の経綸」との関係性をより厳密に分析することによって両者が分節される地点を明らかにしたこと、またこうした論理展開を後期の倫理・社会思想において跡づけると共に、『聖書を考える』の背後に存在するキリスト教思想の体系的な再構築を行ったことは、重要な成果と言える。

2. 本論文の各部各章においては、満ちあふれの論理をはじめとし、中期リクールの宗教言語論における思惟の「反省と顕現の両極構造」、イデオロギーとユートピアの非対称的相補性、正義と愛の弁証法、そして贈与の経綸、希望の図式、隠喩的存在論など、リクール哲学の基本的な思惟構造や論理が取り出され分析されている。こうした議論を貫いているのは、哲学的反省の成立する場であると同時にその限界をなす事柄についての問いであり、リクールの宗教思想のまさに核心に関わる問題である。リクールにとって、哲学とは、象徴、テキスト、範例、証言といった形で、いわば理性の外部から所与として与えられるものに理性が触発されて（顕現を介した反省や愛による正義の触発）、間接的な仕方では遂行される解釈学的反省に他ならない。リクール哲学にとっての宗教思想の意義は、ここにある。なぜなら、宗教的象徴・隠喩・テキストは、まさに理性に対して、触発し反省を促すものだからである。こうして、聖書、特にそこに見出される範例イエスが、リクールにとって重要な意義を有していることが明らかになる。

3. リクール哲学には、正義と愛の弁証法や満ちあふれの論理など、キリスト教思想にとって重要な議論が数多く見いだされる。もちろん、本論文においてそのすべてが十分に論じられているわけではないが、近代における世俗化の状況下で信仰がイデオロギーかユートピアかのジレンマに直面せざるを得ないとの指摘、あるいは聖書テキストのジャンル論との関連において「多中心的自己」と言いうる自己論が展開できるという論述は、現代のキリスト教思想にとっても示唆的である。

4. 後期リクールの終末論との関わりで展開された復讐や死者の問題、あるいは神論の中で論じられた隠喩的存在論に基づく「存在する＝働く＝愛する」という神理解の問題は、いずれも現代の宗教哲学の新たな理論構築の可能性に関わる重要な論点であって、今後のさらなる展開が期待される。

以上の点で優れたリクール研究と評価できる本論文にも、いくつかの問題点あるいは不十分な点が見いだされる。たとえば、リクールのキリスト教思想が哲学に対して有する意義についてはかなりの程度の解明がなされたが、赦しや逆説などをめぐる議論において見られるように、リクールの議論がキリスト教思想に対していかなる意義を有するかの分析は不十分なままに止まっている。こうした議論の不十分さは、リクールにおけるロールズの正義論やアーレントの赦し論の分析についても当てはまる。リクール哲学におけるキリスト教思想の解明という本論文の意図から見ても、さらに踏み込んだ考察が望まれる。

しかしこれらの問題点は、広範かつ長期にわたるリクールの思索の中に断片的に存在するキリスト教思想の論述から、一つの体系的な思想を再構成した論者の力量から判断するならば、今後のさらなる研究によって克服可能なものであり、本論

文がリクール研究として学界に独創的な貢献をなしたことを否定するものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として、十分価値あるものと認められる。2007年4月19日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。